

「動き」から「ころ」へ

丸山 慎 (Shin Maruyama) ・ 河野哲也 (Tetsuya Kono)

国立情報学研究所情報社会相関研究系 ・ 立教大学文学部

提 題 (丸山 慎)

〈はじめに〉

「遊びの中で生まれるロボットの心」ーこの提題の含意は、“遊び”すなわち周囲の環境やモノ、そして他者との接触が生じる場において「心」の成り立ちを仮定するということであろう。これは、「心」と呼ばれる“何か”を科学的に分析できる単位に置き換え、個としての「心」の実体の解明を目指してきた心理学の歴史に対する意義ある挑戦である。そして「ロボットー」である。テクノロジーが生んだ異質なモノとの接触が「心」を創発させるならば、生命体のみならずあらゆる外的なりソースとのダイナミックな関係の取り方とその結果を「心（と感じるもの）」として位置付けることができるかもしれない。そこで私は、「外的なりソースとの接触の中で『心』の存在を感じ合うための基盤」について、特に「動き」と「不定性」という観点から議論していきたい。

〈「心」あるコミュニケーションと「動き」〉

今回、藤崎・麻生両氏から提供された研究では、幼児と犬型ロボットとのコミュニケーション場面の観察結果が報告されている（藤崎・倉田・麻生, 2007）。興味深いのは、遊び相手となったロボットのタイプによって子どもの行動が異なっていた点である。動かずに紋切型の「ことば」のみで対応するロボット犬に対しては、「悪態をつく・叩く・モノを投げつける」といった決して良好とはいえないやり取りが生じた一方、言葉は発しないが柔軟で多様な行動をとるロボット犬に対しては「何しているの?」といったような疑問の投げかけ、動作の模倣、そして動きに対する警戒といったやり取りが観察されたという。後者では、子どもたちがロボット犬を社会的な他者と見做し、相互の関係の取り方を模索するような状況が生まれていたと考えることができる。つまり、ある程度の自由度を持ったシステムによって自律的に動く存在（「警戒」という構えをとる場合があったのは動くロボット犬に対して自律性を認めていた証拠だろう）の知覚は、コミュニケーションの質に決定的な影響を与えるのである。

自己と外界との関係を独自の仕方で切り開く、あるいはコミュニケーションが営まれる場面において、「動き」が本質的な寄与をしていることを示す研究がある。例えば Thelen ら（1993）は、生後一年間にわたって乳児のリーチングを観察した結果、その発達が共通の原理に従っているのではなく、乳児の自発的な腕の運動の内在的なダイナミクス（intrinsic dynamics）から導かれていることを報告している。それはモノとの関係を結ぶために、それぞれの乳児が身体に根ざして探索・発見した固有の解であり、「運動に顕れた意図」とも呼ぶべきものである。また個人間（母子間）での会話において観察される相互の「動き」の同期性の高さ

は、親密さや好意的な関係に影響を及ぼしているという (Bernieri, Reznick & Rothenthal, 1988)。これらの知見から、「意図」や「親和性の理解」といった「心」の活動は、自己および自己と他者との間の「動き」の知覚と制御を基盤にしていると考えられるのではないだろうか。

〈自律性のある動きのなかに「心」が生まれる〉

生態学的アプローチを創始した J.J.ギブソンは、「動くために知覚しなければならない、しかしまた知覚するために動かなければならない」(Gibson, 1979) と述べ、知覚と動き(行為)が循環的に作用し合っていることを指摘した。すなわち「動くということ」は、環境および対象を知るための本質であり、このことは動くロボット犬に対する幼児の行動がより豊かであったこと、そして先に言及した諸研究の結果と軌を一にするものといえるだろう。

また、動くロボット犬には何らかの自律性が知覚されていると先に指摘した。自律性を対象に認めるということは、自分には予測や制御がうまくできないもの、つまり「不定性」を自分の中に抱え込むということであるという(池上, 2007)。「わからなさ=不定性」が契機となって、それを相手に確認したいという動機からコミュニケーションが育まれるというのである。例えばロボット犬の動きに対する「警戒」は、まさにこの不定性から生じたものだと考えられる。

全てが自明で、一切の淀みや躊躇のない行為を示す対象に、私たちはいつまでも興味や疑問を抱き続けることはないだろう。ある部分では予測し難い“不定性”を備えた“自律的な動き”が知覚されるときにこそ、対象への探索的な意識と行動が生じるのではないだろうか。そのようなロボットに対して、子どもたちは“心ある遊び相手”としての価値を見出しているのだと考えられる。

コメント (河野哲也)

かつてスピノザは「神即自然」と唱えた。自然があるのだから神は実在する。この誰も否定できない論証に、当時の人びとが無神論のレッテルを張ったのは、スピノザの神はあまりに超然としていて、我々人間に何も為さないからである。だが、「であるからこそ、神なのだ」、スピノザはこう答えたことだろう。ロボットや動物は心を持つかという問題もこれに似ている。心は規範的な概念であり、社会がこの言葉にどのような価値を持たせるかに、それが実在すると言えるかどうかも依存する。我々と相互交渉することが、「心」の存在を感じさせるのか。それとも、我々の配慮と無関係に、高度に自分勝手な振る舞いをする者にこそ、「心」があるのか。心理学は価値から不自由な学問であり、哲学から逃げられない。

心が関係性であるとすれば、無生物にも心をも認めることが可能であり、それは、相貌的知覚の世界、すなわちアニミズムの世界となる。しかし、丸山のように、心が自律的な動きの世界にあるとすれば、特定の生物種のみ心的なものを認めることとなる。だが、さらに我々は、普通、その自律的な行動をとる生物種の一部しか自分と対等の存在と見なさない。このことは、私たちの心の定義が自律性よりもさらに狭いところにあることを暗示しているのではないだろうか。